

瞬時に顔が思い浮かぶ、ある種の声
顔声一体、それが三橋美智也だ
風貌が声線、輪郭されて行く
声にはそんな呪力がある

文 山川智

土臭かった、泥臭かった

北海道上磯郡に生まれ函館で育った三橋美智也は

寒風で鍛えられた喉から

ハイトーンな小節を伸びやかに回した

独特な声は洗練された都会の声ではなかった

潮騒が聞こえてきそうな

海風に乗って響く声だった

自ら撥を捌く

津軽三味線の音色と共鳴する声だった

歌声は人々の琴線を揺さぶって

圧倒的な支持を得た

『江夏追分』から最後の唄『幻灯の町』まで

生涯レコード売上枚数1億6000万枚

日本人一人が1枚買った勘定だ

耳を澄ませば、ヒット曲の数々が：やがて

あのヒット曲『おんな船頭唄』が聞こえだす

へうれしがあらあせえーええ

なかあせーええきええたあ

耳朶を揺るがす声は、楷書ではなく
行書の筆先のように繋がっていった



昭和歌謡 誕生物語 【第25曲目】

— おんな船頭唄 —

三橋美智也

艶のある高音と哀愁が漂うその声には日本人が持つ独特の土着性があり、それが聞き手の心の奥深くに染みわたった——。そんな魅力的な歌声で、昭和歌謡史に燦然と輝いたのが、三橋美智也だった。

4歳の時に炭坑で働く父を落盤事故で亡くした三橋は、民謡歌手だった母親のもとで喉を鍛えられ、9歳のとき民謡コンクールで優勝。母と共に民謡の巡業に参加したのち、津軽三味線一本を手に上京する。19歳の時だった。

その後は、ボーラーマンをしながら高校へ進学。民謡教室を開いて学費を稼いだ。たまたま弟子のレコードデイングの付き添いで訪ねたレコード会社でスカウトされ、昭和29年、歌手デビュー。翌30年に発売されて200万枚を超える大ヒットとなったのが、『おんな船頭唄』だった。

その後も『哀愁列車』『リンゴ村から』『古城』とヒット曲を連発。デビューから8年で40曲ものヒット曲を量産し、1000万枚のレコード売り上げを達成。全盛期には、「三橋で明けて三橋で暮れる」と言われるほどの人気だった。

そんな三橋がイメージを一新させ、周囲を驚かせたのが昭和53年（1978）のことだった。きっかけは初めてDJを務めたラジオ番組、『電撃わいどウルトラ放送局』（ラジオ関東・元ラジオ日本）。

この番組で三橋は、当時世界的ヒットを飛ばしていた映画『サタデー・ナイト・フィーバー』にならない、流行語「フィーバー」を連呼。さっそく目を付けた食品会社のテレビCMに起用し、三橋はサン格拉斯と白いスーツのジョン・トラボルタ風ファツションで出演すると、「ミッチー」の愛称でブームに火が付き、若者たちの圧倒的な支持を集めることになった。

民謡で鍛え上げた張りのある歌声と、お茶目なスタイルのミスマッチで、20年の時を経て一世を風靡することになった三橋。だが、晩年は離婚や借金など、私生活での心労や糖尿病が悪化するなどで声の衰えも目立ち、平成8年（1996）1月、多臓器不全により旅立った。まだ、65歳だった。

中卒や高卒が金の卵と呼ばれ、集団就職が全盛だった時代。地方から大都会に出てきた若者たちの故郷への想いを、哀愁を込めて歌い上げた三橋節は、高度成長期の世相を背景に多くの人たちの共感を呼んだのだった。

山川智 ●1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の派』『東方神起 J.Y.J.を行く』(共にイーストプレス)、『ヒーランドキュメント 幸せのきずな』(リーブル出版)など。また出版プロデュース作品として『生きる 義家弘介』(スターツ出版)、『デキる社員』(狂食ギャル) (共にイーストプレス)など多数。